

日本語とその研究との背景

小引

この一篇は、別に特に學問的な論文ではないことをあらかじめ斷つて置かなければならない。わたくしは、ドイツへ都合二回行つてゐるが、その第一回は、一九五二年の夏であつて、その折、じつは、ハムブルク大學で、いはゆる Gastvorlesung をおこなつた。この一篇は、その拙い招聘講演の内容である。その講演を終へてから、わたくしは、ぶらぶら孤獨の旅行をつづけ、それはなかなか愉しかつたが、そのとき、ふと考へたことをいまだに忘れない。

それは、旅の恥はかきすて、といふくちずさみの意味である。江戸の町人たちが、しやれや地口のすきだつたことは、いまでさへ下町のかたぎのなかにまだその片鱗をうかがひ得るをりがあると思ふが、どうせ「旅の恥はかきすて」などは、江戸ごのみのかる口にちがひない。これは、ひとを茶化したことばでなければ、自嘲であつて、それがはじ

龜 井 孝

めて口をついて出たときにこそ、それはおもしろかつたにちがひない。しかし機智に乏しい人間にむしかへしつかはれてゐるあいだに、おそらく、それは、その用ゐられる文脈が、げすなばめんじうらされて行つたものであらう。つまり、思ふに、あれは、本來は、「旅の恥は書き捨て」なのであつて、旅から旅へながして食客生活をして行つたへば俳諧師やくひつめた多かきの揮灑に對するあざけりであつたのである。しからば、わたくしのばあひは、いささか、旅の恥はよみすてであつた。そのご、原文は、第二回目のドイツ旅行のさい、はなしがあつて、ドイツ東亞學會雜誌に載せることとなつた。もはや、それをさらに日本文で發表することはさして意味ありと思はないが、ただ、ひとつの點だけは、理解してもらひたいのである。すなはち、内容については、なにか、日本語の學問研究の現状や特質についてとの、向ふの需めに應じたはなしをしたのであるが、これは、國文學とか日本歴史とかの概念に括られるは

なしでなく、ひろく日本學 (Japanologie) と呼ばれるものに屬する講演だつたのである。廣漠たる日本學の領域から、なにかわたくしの知つてゐる部門について、それを大部分は、専門の日本學者でない聴衆の前でかたることは、わたくしのごときにとつては、じつは、内容そのものとかかはりなしに、あまりらかな藝當ではなかつたのである。そして、もし、參考になるなら、こんなはなしにも、多少の關心がもたれてゐるといふ點であらう。西洋人、殊にドイツ人が、日本文化の特異性といふ問題に、かなり強い好奇心をもつてゐることだけは事實である。

なほ、獨文は *Über den Hintergrund der japanischen Sprache und ihre wissenschaftliche Betrachtung* (Nachrichten von d. O. A. G. 75. SS. 25—35) として發表された。しかし、もとの標題は、*Über den Hintergrund … ihrer wissenschaftlichen Betrachtung* であつて、その方がいいので、日本文の方では、「日本語とその研究との背景」と題する。原文の作製にあつては、いま、東大の講師として來日中の、G・ヴェンク博士に、全面的にお世話になつた。ここに、謹んで謝意を表する次第である。(一九五四・七・九)

日本語とその研究との背景

日本には、なるべく、自分の一身に關することを、自分から、聞かれもしないのに、はなすことは、しないやうにするならはしがあります。自分のことを聞かれるかどうかは、相手の關心にまかせ、自分自身はひかへ目にしてゐる方が、ゆかしいといふ考へによるわけです。さういふばあひ、しかし、自分自身の方は、相手に對して決して冷淡ではないことを示す無言の表情として、しづかに微笑をたたへる——いろいろのばあひ、日本人は、このやうな微笑を口もとに浮べます。たとへば、自分のいひたいことの或る部分は、微笑にゆだねてわづかにそれを暗示するにとどめる、あるいはまた、心の中にことはではあらはしがい深い悲しみを懷いてゐるとき、しづかな微笑をもつて心の均衡をたもつ。これが、物事を不徹底にとどめておくことを好まない西歐人には、何を考へてゐるか心底のしれない、無氣味な東洋的微笑として映ずるわけです。(一) このやうな微笑そのものは、もとより狹義の言語には屬さないものではありませんが、しかし、

社會的習慣としては、現實のはなしのはこび——言行動——と密接にむすびついた特有の表現形式であります。かやうな性向が、言語様式の上にもまた一つの傾向となつて、あらはれてゐるとしても、それは當然でせう。

日本語は、印歐語とは根本的にその構造を異にしますが、もとより、——まさに言語として——それ自體に内在する固有の論理は、これを有つてゐます。たとへ表現のしたかたはどのやうに異つても、ヨーロッパ語が傳へうる論理的内容を日本語が日本語なりに傳へうることは、申すまでもありません。ただ、過去の日本の文化は、理念的内容を論理的に表現することを容易ならしめる方向へと、日本語をみちびかなかつたといふことが、わたくしの考へでは指摘できるとおもふ次第です。ひとつ、みなさまに、日本文化のこのやうな方向に對する一例を示してみませう。日本語には、古代へさかのぼると、極めて單純で一貫した人稱代名詞と指示代名詞との體系があります。すなはち、八世紀に編まれた萬葉集、これは四千五百首のうたをふくむ歌集でありますが、このなかには「我」と「汝」——*wa*に對しては *na(re)* *du*に

對しては *na(re)*——これが頻繁にあらはれてゐます。ところが、十世紀の初頭に編まれた古今和歌集では、そこにふくまれる歌の總數千百首のうち、表現のおもてに「我」と「汝」とのあらはれてくるものは、まことに少いのであります。

さらに——。日本語の文章は、本來、主語なしでかまはない、これは、近代ヨーロッパ語の文法に比べると、日本語のいちじるしい特徴であります。そのうへ、日本語の動詞には、ラテン語やギリシヤ語にみるやうな動詞の語尾で人稱の區別をする方法はありませんから、言語的に表現された主語をもたぬ文では、純粹に形式的な文法のたちばからいへば、誰があるいは何が主語なのかは、きめられないのであります。これは、ヨーロッパ人の眼にはゆゆしい缺點として映ずるでありませうが、日本語の言語論理にとつては、意味の脈絡から主語のあきかなばあひには、それはそのままのまゝであつて、誤解の恐れをこえてわざわざ主語をあきらかにするのは、却つて、冗語 (*Pleonasmus*) と感ぜられるのです。つまり、主語は文法上要求される形式的な要素として發

達せず、文體の問題として取扱はれてきたのでありません。この同じことが、目的語についてもあてはまります。他動詞——勿論、日本語のばあひには、意味上の——の直接目的が、つづきながら、そのままあきらかなばあひには、もはや *as to* とか *in* とかにあたる語のくりかへしは、はぶいてしまひます。ただし、これは、日本語としては、ヨーロッパ語の文法におけるとおなじ意味での省略ではないのであります。なぜといふと、日本語では、他動詞と目的語との關係は、文法的なものではなく、單に意味の要求に従ふだけのものではないからです。

おほまかないひかたを許されるなら、ヨーロッパの傳統においては、對話は論争の形で發達しておりませう。對話を通じて到達される了解こそ哲學においても實際の政治においても客觀的な妥當性を賦與するところのものでありませう。おそらく、ヨーロッパのみなさまのお考へでは、表現されたものは、完結した客觀的精神として、それ自體、すでに主觀的精神を超越した存在である筈だとお認めのことと存じます。日本および日本語に對しては、これは、必しもあてはまりません。ここでは、はな

日本語とその研究との背景

しのやりとりは、相對立する二つの「我」の力學的な緊張關係として把へられ、表現されたもの自體が感覺的なものと主觀的精神とから解きはなたれない。それは、客觀的精神の部分とはならないのであります。對話に對するこの相對的な考へ方は、日本語の無意識の傳統となつてゐます。かういふ考へを背景として、現在、日本の學者のなかには、幻想主義の美學説とよく似てゐるのではないかと思はれる言語觀を懷いてゐるひともゐます。つまり、ミロのヴェーナスも客觀的には大きな石の塊りでしかなく、藝術作品における本質的なものは主體に還元されると主張するのが幻想主義であるならば、ここにいふ日本の言語理論は、言語における本質的なものを主體の表現行為において認識しようと考へるわけです。一般的に、日本人は、自己の内面において感ずるところのものの具象化として言語を取上げ、はなしの重心は、この目的に副ふやうな表現技巧の洗煉に向けられるのであります。それは、文藝の上では、往往に、眞のしたごころを容易には捕捉させないところの韜晦となつてあらはれます。しかし、このやうなミステイフィケーションは

一橋論叢 第三十二卷 第三號

表現のうへにとどまり、必ずしもそれは内容が特別に深くかつ微妙なため言語的表現が近づきたい結果であるとはかぎりません。

日本語にとつては、表現の關心の重心は、はなし手個人個人のみに、あるいは、ひとへにかれらが取上げる主題にかかるのではない、はなしての間にうちたてられ、はなされる内容の形式を支配するところの、人間と人間との間の關係の緊張の場に、まづ第一に表現の關心の重心がかかるのであります。煩瑣な敬語の組織は、かやうな地盤のうへに生れたのであります。まづ第一に、敬語のニュアンスは、對話または報告が、いかなる場面に對するものであるかを暗示します。つぎに、敬語の組織は、主語が誰であるかのみならず、あいてが誰であるかも、代名詞なしに、動詞のみで、微妙に示しうる可能性をもつてゐます。つまり、日本語には、人稱をそれそのものとして explicit なかたちで、つまり特別な語なり特別な語尾なりで、あらはすべき制約はありませんが、文體のうへで暗示することによつて、間接には人稱を言語へ導入してゐるのであります。

しかし、一旦因襲化してしまふと、敬語の存在は、言語特有の強い社會的拘束力で日本人をかたく縛ることとなりました。日本語は、形式的な一人稱および二人稱の代名詞に意味のうへであたるところの名詞をば數多く敬語のたちばかり工夫してゐます。つまり、たとへば、ドイツ語では「*ich*」の一語で足りるところを、目上のものにいふ我、同輩のものにいふ我、したしみをこめた我、ぞんざいで、強さうにひびく、男だけしかつかはない我等等に分化せしめてゐます。また、年齢や階級などによつても、ちがひがあります。かりにここになにか「*Es* trent hoch. setzen」といつたみじかい一句ではじまる小説があるとすると、これだけで、日本の讀者には、この主人公が老人か若者か氣どりやか無骨者かなどのみきはめがつきうることを、あたかも直接にその主人公のこゑを耳にしてゐるかのごとくなのであります。二人稱になると、分化はさらにはげしく、到底、ドイツ語が「*du*」と「*sie*」とをもつてゐるどころのはなしではありません。つまり、日本語には、文法的な意味では、一人稱の代名詞も二人稱の代名詞もなく、論理的な觀點からみてのみ、一

人稱の代名詞乃至二人稱の代名詞に對當する名詞があるのであります。

かかる事實は、言語が哲學的認識のてがかりであるかぎり、人稱關係の論理的な把握を日本人から遠ざけてゐるといひえませう。さきほど一言いたしましたやうに、歴史的にいふと、萬葉集と比べて、萬葉集よりあたらしい古今集で、「我」と「汝」との使用が、無にひとしいほどわづかなのであります。が、日本語としては、おそらく、これこそ當然なのであります。洗煉された古今集の歌人たちは、いまだはるかに素朴な萬葉集の歌人たちよりも強い自意識をもつてゐて、まさにそのゆゑに、かれらは、言語表現のうへにこれをのぼせることを様式的な技巧として斥けたのであります。しかしながら、古今集に反映する人稱代名詞の用法、つまり人稱代名詞の缺如は、同時に、當時の社會の趨勢と、そのごに日本のたどつた文化の方向とを示すものであります。「我」と「汝」にあたる古語の衰退は、それとうらはに、それらのいろいろな補充をつぎつぎと登場せしめるのであります。その結果は人間關係が、社會における人間と人間とのあひ

日本語とその研究との背景

だの具體的な諸關係として意識されるやうに固定するのであります。こんにち、日本人は、社交的な對話の形式とは無關係の、論理的な内容の文章、つまり、學問的な論文のごときを、現代語で書かうとするはあひ、敬語のいろいろあひのない形式的論理的な「我」(Ich-Wort)がないため、嚴密にいふと、當惑します。それどころか、第一人稱をあはらすべき語のくりかへしは、口語文として、どうも耳ざはりをまぬかれないのです。それといふのは、つぎのやうなわけからです。

日本語には、二音節の單語が壓倒的で、合成語をのぞいては、四音節や五音節のものはほとんどないのに、こんにち、「我」の正しい形である「ワタクシ」と「ワレワレ」とは、いづれも四音節からなつてゐます。これに格助詞がついて、(ich, mir, mich, mein) それぞれに「ワタクシガ・ワタクシニ・ワタクシオ・ワタクシノ」となります。たとへば „Mein Vater hat mich mehr als meinen Bruder lieb.“ をそのまま日本語に譯すと「わたくしの父は、わたくしの弟より、わたくしを可愛がります。」となります。これは、まことに正しい日本語であ

ります。しかし、日本人にとつては、これでは、正しすぎるのであります。このやうな例は、日本語から、いくらでも擧げることができます。

現代、日本人は、西歐哲學に異常な尊敬と、これを理解せんとする強い熱情とを懷いてゐます。しかし過去において日本語そのものへの反省から独自の哲學を生むことはしませんでした。言語の詩的觀照性の問題については最大の注意を拂つたことがあつても、表現の構造の分析から論理を打ち出すことは試みなかつたのです。哲學的思考 (das Philosophieren) が日常的なものについての反省をもつてはじまるといふ意味では、日本にも固有の思考の諸形式は生れてゐますが、しかし、過去における日本の思考の形式の方向は、たとへば、學問としての近代ドイツ哲學にみられる方向とは別であります。日本は、言語を哲學の媒介として否定するところの、極端な直觀主義の非合理哲學をそだて上げました。かかる直觀の原理は佛敎的思考の產物ですが、しかし、かかる傾向は、日本人の、少くとも當時の日本人の性情に合致したものがあつたわけであらう。もとより、日本文化の特異性

に對する歴史哲學的解釋は、わたくしの任ではありませんが、こと言語に關するかぎり、つぎのやうにいへませう。たとへ、いかに言語に對して否定的な態度をとる哲學といへども、それは、無神論から宗教の問題を引きはなせないと同じやうに、言語の問題から切りはなすことのできぬものであります。單に經驗的のみならず、見方によつては、先驗的にも、哲學の問題は、言語の問題と共にある、發生的にも論理的にも、この二つの問題は一つ源に——これを概念として何となづけるにせよ——歸せられる。言語的表現の限界を超えたものに、象徴的なすがたで言語のよそほひをあたへようとするくはだては、それ自體、ほんらい、一つの哲學的態度、つまり、客觀的なものに對して根本的に主觀的なものが優位を占めると信ずるところの信念からいづる態度であります。このやうな點は、すでに哲學者または文化史家によつて、もつと的確に、また、もつと詳細に論ぜられ來つてゐるところかもしれませんが、とにかく、大づかみに申しますと、それは、これまでの日本文化がとつた方向に對し、特異な意義をもつものといへるにちがひありません。

せん。

日本のうたは、三十一音節で、詩形として、完結してゐる、フランスでハイカイ（俳諧）の名のもとに模倣されたことのあるものは、わづか十七音節から成立するのであります。上代には、もつと長い詩形もありましたけれど、これらは、だんだんにみすてられて行つてしまつた。しかし、逆に、ここに、言語をこえた内容のふくみを傳へようとする試みがひそんでゐるのであります。理論的にいひますれば、極端なばあひには、無言が感情の表現の意味をもつといへる、それは、あたかも、日本畫において、描かれぬ空間が大きな意味をもつと同じわけです。日本の歌論では、餘情といふ契機、すなわち、表現されない感情、いな、無をもつて表現された感情の契機が古くから論ぜられ強調されてきてゐます。したがつて、日本人は、互に一緒にゐるときも、しばしば、もだしたままでゐる、さうして、やさしい微笑またかなしい微笑が言語以上にものをいふことになるのです。かういふ微笑も、ごく控へ目なほど、印象的です。戀人同志は、しづかな微笑を交すことによつて、強い抱擁より

日本語とその研究との背景

も、愛情と幸福感を分ちうるのであります。まつたく瑣末なことではありますけれど、日本人が外國ではあたりまへな風習のなかで愛情の表現としてのたくましい接吻に一番驚くのは、日本人らしいところでありま^(三)す。

しかし、まさに、このやうな點において、一種の革命が起りうるといふことは、最近の社會變化によつても現にみられます^(三)。そして、かかる革命の可能性は、また、歴史を超越したところの素質が日本人なり日本語なりの特性にやどつてゐると考へるなら、これは危険であることを示します。いづれの諸文化もそれぞれに特異な歴史の諸經驗が生み出した精神をもつてゐる、いかなる文化形態も、人類が自らの上にこころみ來つた大きな實驗の結果と申せませう^(四)。なかんづく、このことは、言語の性格について、あらゆる民族にあてはまります、たとへ、地球上の最も未開な民族でも、言語のばあひには、記錄こそたなくとも、長い歴史を経ておりますから。たゞ、日本の文化は、いはゞ、袋路へ入つて行つて、さういふ袋路の文化としては、たぐひのない發達をとげましたが、いまや、西歐との對決にますます迫られてゐます。

ほぼ、この一世紀に互つて、日本は、この對決からあらたな生命としての固有の文化を創造することに悩んだのであり、かかる努力緊張がやどした矛盾相剋こそ、このたびの悲惨な宿命的な戦争の精神的背景をもなしてゐると考へます。さてしかし、はなしを本すじの言語にもどしませう。日本語は、言語としては、言語であります、すなはち、かかる本質において、それは、言語としての何の資格にも缺けるものではありません。のみならず、世界の諸言語のうちでは、文化的諸言語の一つに屬します。ただ、まさに、それゆゑに、それをつつむところの、異質的文化の背景について、いささかの素描を施してみただけであります。

二

上に述べたやうな日本文化一般との聯關においてみられる日本語の特質は、一體、日本語の考察がどうあるべきか、また、かつてどうあつたかについての問題をここに提起することとなるでせう。傳統的な哲學思想が日本では認識の手段として言語を斥けたといふこと、これ

は、日本にふるく自國語の研究がなかつたといふことをすこしも意味するものではありません。それどころか、言語研究は、長い傳統をもつてゐます。それは、支那語およびそれを通じて梵語を知るに至つて促がされたものであります。しかし、これらは、まだまだ芽ばえにすぎません。⁽³⁾一六〇〇年前後にヤソ會のキリスト教徒は偉大な業績を残しましたが、これは、なにも、日本の語學研究に直接の影響を及ぼしませんでした。かへつて、かれらの方が、日本傳來の研究成果をとり入れてゐます。十七世紀の末に至つて、日本の言語研究は、あらたにみづからの力で、こんにちから振りかへつてみても、その業績を誇りうるところの組織的な學問へ成長してゐます。しかし、つひに、十九世紀の後半に及んで、傳統的な日本語研究は、あらたに輸入された西洋言語學の組織のかへ解消されてしまひました。たゞし、解消されたとはいへ、滅されてしまつたといふ意味ではなく、それは、ゆたかなみのりをもつたところの、身をころしての合一——Aufhebung——であつたのであります。しかし、やつぱり解消は解消であつたのですから、もし、國學の傳

統から自己の理論を展開させようとした東京大學の時枝誠記教授の指導のもとにおける有力な一つの傾向が現在の學界に存してゐないならば、日本語について必要な研究がなんたるかを自國語の研究の傳統から考へることは無用のわざであるかもしれません。さきに、美學的幻想主義と比べうるといつたのは、この時枝學派なのであります。

國語學史の研究から出發した時枝教授は、はじめから、西歐的思考形式に反對で、自分の言語觀を、傳來の固有の言語觀の上に展開させねばならぬことを主張します。かれは、言語を、はなされたものからでなく、その基礎である心的過程から出發して考察することによつて、自説を建てるのです。かやうな前提で得られた鋭い理論の内味について、それを一一ここに述べるいとまは遺憾ながらありません。しかし、一二、疑義をさしはさんでおきませう。まづ第一、その理論は、國學の傳統に直接かたどられたものではなく、論者自身の獨自の見解であります。この獨自の見解をうちたてるためには、西歐の言語學説が批判の材料になつてゐます。したがつて、

日本語とその研究との背景

西歐の學説も、國學の傳統と同じ役割をしてゐるわけです。第二に。その理論は、たとへ、日本語についての思辨からまづ生まれてきてゐるにせよ、それは、どのみち、時枝教授にとつては、演繹的に個々の具體的事實へ向つてゆくところの、確乎たる出發點となつてゐるのです。したがつて、その理論は、言語一般の本質に關する普遍的な理論としてくりひろげられて、日本語にのみ限られたものとなつてはゐません。しかし、そうになると、國學の傳統に立つて日本語の特質の理解へすまうといふ方向とは、結局、逆になつてしまひます。最後に第三。言語の本質の問題は、もつぱら、哲學の問題であるはずであるが、しかし、實際には、かれの著述は純粹に哲學的でもないし、かれ自身そもそも、哲學的な敘述を目ざしてゐない^(五)。

時枝教授の理論をただしく位置づけるためには、現代における日本の言語學の發達に一瞥を加へる必要があります。一八八六年（明治十九年）といふ年は、日本の言語學にとつては、記念すべき年です。この年に東京大學には、はじめて言語學科が開設されました。まづ、マク

一橋論叢 第三十二卷 第三號

ス・ミューラー(Max Müller)の著書のやうな、通俗的な
 として英語で書かれたものがよまれました。また、日本
 において、講壇から最初に言語學を學生たちに紹介した
 功勞者はB・H・チェムバレン(Chamberlain)でした。
 現代日本の言語學をうちたててににあたつて、この人の致
 した貢獻は、他に比肩すべき例をみません。しかし、か
 れは、狹義の言語學者ではありませんでしたし、自分で
 もさうは思つてゐなかつたでせう。自分では、日本の古
 典學者と思つてゐたでせう。ドイツの歴史言語學は、日
 本政府からヨーロッパへ派遣された若い日本人のうちか
 ら少數の言語に興味をもつた人々が出て、その人たちに
 よつて將來されました。わたくしの恩師橋本進吉は、つ
 ひに、一生、國外にはでませんでした、はじめて學問
 に志したころに受けたヘルマン・パウ爾(Hermann
 Paul)の「言語史の諸原理」(Prinzipien der Sprach-
 geschichte)の感銘をいくたびかわたくしに洩らされた
 ことがあります。おそらく、このパウルの著は、日本で最
 もよく最も長くよまれた専門書の一つであらうと思ひま
 す。橋本教授は、西歐言語學を武器として日本語の歴史

的研究をはじめ、さういふ研究に對する眞に科學的な研
 究の基礎を築いた學者として忘れることのできない人で
 す。戦争の最後の年にはなはだ不自由な生活のうちに亡
 くなりましたが、その藏書の棚を後整理したとき、若
 いころのしごととおぼしいいろいろの書きぬきがみいだ
 されました。それらは、博士論文(Dissertationen)、記
 念論文集、アカデミーの報告、専門雜誌の論文などからの
 丹念な書きぬきだつたやうです。古い世代の人たちは、
 このやうに、日本語の研究へ向ふにも、言語學をまなん
 で、そこから出發して行つたのです。ヨーロッパの學問
 から出發する以外には日本語を研究するばあひでさへ、
 なにをどう取扱つたらいいのか、なにもかも分らない變
 動期でした。

こんにちは、ちがひます。言語學には、大學のうち
 に、言語學科といふ一つの學科があつて、ここへ入る學
 生は、印歐語學をこころざさうと、アルタイ言語學へ向
 はうと、音聲學からはじめて、嚴格な言語學の基礎的訓
 練をうけるのが建前です。ところが、日本語の講座は國
 文學科に屬してゐます。その結果は、國文學科へ入る學

生のうちでまれに文學でなく言語の方を専攻しようとする者も、視野が日本語だけに限られがちになります。元來は、教育上の便宜から分けられたのであるが、國文學科と言語學科とが別個になつてゐることから、相互の連絡が脅され、また、學會も別別になつてゐます。學問の分科はどここの國でもいろいろの不便困難を招いてゐるわけですが、過去にヨーロッパ文化の背景をもたない日本では、分化がただちに孤立化になる恐れがあります。日本は固有の文化の傳統の上に、西歐の文化を接木しました。ここでは、わるくすると、根もあたらしい芽とともども枯れてしまふ惧があります。國語學には、事實、さういふ憂ひがないとはいへません。橋本教授の後繼者の時枝教授は國文學科の出身ですが、その學説が國語學の内部においては反響をよんでも、言語學一般の側からはなんの批判もうけないのは、たしかに偶然でありません。

なほ、ここに學問の命名について、少々、注意を喚起しておきせう。すなはち、ドイツ語でいふなら、一義的に「Linguistik des Japanischen」とか「Wissenschaft

日本語とその研究との背景

der japanischen Sprache) とかなるべきものを「國語學」すなはち「Wissenschaft von [unserer] Landessprache」といふよび方でよびます。日本人にとつても、「日本語」と「國語」との間には、もちろん、かなりいちじるしいニュアンスの相違があり、語といふものは、人間の意識をきはめて微妙に反映しがちです。術語を變へようとする試みは、無駄でした。もちろん、ことが單に名だけにとどまるものであるなら、なにもかまはない、しかし、私見によれば、時枝教授に至つて、やはり、名が實を規定する恐れを生じました。かれは、語の眞の意味での「國語學」をうちたてました。すなはち、かれは、一方では、「國語學」のなかへ言語教育と言語政策との問題を包括しました、國語にとつては、教育や政策は、大切で、他方、しかし、日本語研究史とともに日本語の歴史的な研究をも、別の領域として、つまり、補助科學として除外します。かくして、かれは、橋本と全く對立の立場をとります。橋本は、言語教育と言語政策は、これを教育と政策の方にまかせ、これを、嚴密な意味での言語研究から區別しました。さういふわけで、日本語の

言語史的研究は、こんにち、「國語學」の主流には、もはやなつてゐません。橋本が移植し、すでのその手で花をひらきかけたドイツ歴史學派の學統は、實をむすぶに至つてゐません。

しかし、歴史學派にさをさす者といへども、言語が國民生活との聯關においてながめられねばならないといふ點に目を閉ぢていゝわけではもとよりない。戦後、日本は、「國語研究所」といふ特別の國家機關を設け、ここで個人ではなしとげたい組織的な調査をくはだててゐます。從來は、議論だふれにをはりがちだつた國語教育國語政策の問題が、將來は、いろいろな統計的資料にもとづいて、以前よりも、もつと學問的な根據から解決されることとなませう。この種の問題の範圍がしめる比重は、いやしくも、これをかるんずべきではありません。しかし、ここでは、ただ、ひとこと、西歐人には容易に想像の及ばない、大きな國語問題が、じつは、國字問題、つまり、まづ漢字の問題にあることを申すにとどめて置きます。

さて、しからば、日本における言語史の現状は如何。

すでに、文獻は尨大で、また重要なものがあります。しかし、個々の問題の通時論的記述 (diachronische Beschreibung) から體系的綜合的な、全體としての日本語の歴史へまですすむには、至るところ、まだまだ隙が多すぎます。もとより、日本語の歴史といつた名を冠したところの書物には乏しくありませんが、すくなくとも、わたくしは、それらに對し、まだ、不満足です。ことに、ヨーロッパにおけるこの種の書物に比すると、まだ、まことに未熟なものばかりです。

しかし、ここは、個個の問題を論ずる場合ではありませんから、日本語の歴史を貫いてゐる一つの特徴を大づかみにおはなしたいませう。おそらく、こんにち、ドイツ人には、レッシングやゲーテの諸作品のことはがいまだほとんどなんらの困難なくわかるであらうとおもひます。日本では、事情がちがひます。十八世紀の文體 (die 18te Sprache) は、こんにちの文體とは、まづたくちがひます。十九世紀についても、同様です。さういふわけで、十九世紀の一世紀だけでも、その初めと終りとは、いろいろいちじるしい文體論 (Sprachstilistik) 上の相違を指摘

できます。これは、いくつもの文體 (Schreibstil) が錯雑しながら、その勢力を交替したからであります。また語彙の變化にもいちじるしい推移がみられます。語彙はあたかも流行のごとくに速かに、この一世紀の間に動搖しました。すなはち、語彙の變化は、近代日本の社會および文化の相貌を鋭敏に反映してゐるわけです。しかるに、他方、日本語は、構造的には、ごく安定をたもちつづけてきた言語です。日本語の歴史は、八世紀の初頭から、單に斷片的にはなしに、かなりこれを明かにすることができまゝ。ところで、八世紀に屬する、かの萬葉集を、一般の日本人は、簡単な註釋でよむことができます。(八) 基礎的な語彙には、こんにちのと全くおなじもの、あるいは、こんにちのからすぐにそれと察しのつくものが、かなり多いからです。また、十世紀の日本語に對して、教育ある日本人は、文法的には、ほとんど困難を感じずに、これを讀むことができます。當時の文學は、もとより、單なる文法的な知識だけでわからうとするには、あまりに表現が微妙で、内容が漂渺としてはゐますが、文法だけなら、現代語からの類推だけでも、ほとん

日本語とその研究との背景

ど誤るおそれはありません。つまり、構造に關するかぎり、日本語は保守的な言語であるといふことが知れまゝ。これについては、ふたつのことが關係してゐます。まづ、構造そのものについていふと、古代の印歐語のやうな高度に文法的な言語では、文法的な變化が起りやすい、他方、支那語のやうな高度に語彙的な言語では、本質的に、文法の變化は起りにくい。大ざつばにいって、日本語は、記憶の負擔の軽い、類推を大幅にはたかしうる文法をもつた言語です。したがつて、構造上、日本語は、文法的な變化の起る可能性からいふと、印歐語と支那語との中間に位するといへませう。日本語の文法の歴史が比較的單純なのは、ある程度、日本語の文法組織そのものが比較的單純なせゐです。(九)

しかし、わたくしは、文化史的要因が日本語のばあひには、非常に重いと考へる。ここには、それに對して、單につきのやうな事實だけを互に對照的に示すにとどめておかう。琉球語は、ふつうに、古代日本語のおもかげをよく傳へてゐるもののやうに信ぜられてゐます。しかし、實際には、全體としてみたばあひ、琉球語の方が、

日本語よりはるかに古代的な姿を失つてしまつてゐます。日本語の内部においても、方言の個々の現象についていへば、はなはだしくづれてゐるものがないとはいへませんが、しかし、他面、日本は、その文化的統一に對する歴史的意識を、過去のいかなる社會的政治的動亂によつても根本的には變革されることなしに持續してきました。かかる意識の支配し來つた社會において、そこに行はれる言語の傳統が、かかる意識の統一を媒介するためにも、保守的に守られるのは、當然のことです。その點、歴史以前の日本語については、なにごとも確實には申せませんが、事情は、決して歴史時代と同じではなからうと存じます。わたくしは、日本語の系統論のてがかりは、この歴史以前の時代にいちじるしく失はれたものとみてゐます。系統論の問題は、たしかに、興味が深い、しかし、それだけに、これを解決するには、また、數へ上げるといろいろの困難もある。ですから、わたくしは、つぎのやうに豫言するに逡巡しません、印歐言語學において贏ちえられたと同じ成功を、日本語の系統論がくりかへすことはありえまい、と――。

かくて、日本語研究の重點も、すでに得られた諸成果の重點も、一に、かかつて、日本語の構造と發達とをそれ自身固有の領域から解明するにあるといふべきであり、ここから、一般言語學に對して出てくるところの利益は、日本語といふものが、比較的閉ぢられた社會的精神的形式のなかで育つてきたといふことのうちに、まさにあるであらう。

註 (日本數字の註は、このたび、日本文に對して、はじめに加へたもの。アラビヤ數字の註は、ドイツ文を印刷するにあつて、書き加へたもの。)

(一) いはゆる東洋的微笑は、西洋では、きはめて評判がわるい。それを知つてゐて、やはり、ふと洩してしまつたことは、わたくし自身一再にとどまらない。たとへば、ポーランドからの亡命者にさる午後、英人とともにお茶に招かれたをりのことであつた。亡命者ロマネク氏は溫厚な紳士であつたが、祖國を深く愛してゐる氏は、敗けても日本の方がどれだけ幸せであるか分らないと言つて、ロシアの暴狀をいたく憤つて語つた。それにわたくしは耳を傾けてきいてゐたのである。

が、ふと、自分の顔が微笑を帯びてゐることに氣がついた。ほかのお客の顔をみて、これはと思つた。

ある晩、かういふはなしのでたこともあつた。いはく、わたしは、戦争のまへ、世界を一周して日本にも立寄つて、いろいろ歓待をうけた。京都で、さる邸へ招かれた。主人は接待のふゆきとどきを詫びて、じつは病床にある奥さんがいま重態なのだといふことを、微笑をもつて語つた。これには、わたしの方が狼敗した。しかし、これが武士道の精神なのでせうね、——と。(最後の一句は、好意ある解釋として加へられたものであるのだが、しかし、要するに、西洋人には、さういふ心理は分りにくいといふ意味である)。

筆者が、東洋的微笑をモチーフにして、本文のはなしをはじめたについては、多少の下心はあつたわけである。

(二) ひと、或は、いふかもしれぬ、日本人がひとまへの接吻におどろくのは、あたかも、かつて日本人がはじめて裸體畫をみておどろいたのと同じである、と。それに、また、もちろん、子供がおやにお休みなさい

日本語とその研究との背景

を云つて寢床にゆくときの接吻などは、まったく形式的なものである。わたくしは、下宿のおやぢのおふくろが、とまりがけであそびに來たをり、チョコレイトの箱を買つてやつた。そしたら、喜んで、背伸びをして、ほつべたに接吻をしてくれた経験がある。かういふ段階の接吻は、單なる挨拶の一樣式である。しかし、はたの人間の方で *respectful distance* をたもつべき接吻が終始みうけられることも、いふまでもない。どうも、これは、裸體畫とちがつて、藝術としていただけない證據に、距離をたもつのである。

こんな手紙をロンドン滞在の日本人の友達からケンブリジへもらつたことがある。「……このごろは、いつまでも日がくれないので、××公園を散歩すると、いく組もの男女が、明るいうちから、かつそのやうに芝生にごろごろしてゐて、なめたり、すつたり大變です、云々」發信人は謹直な學者であつたから、おどろいたといふより、あつけにとられたらしかつた。本文に、わたくしが、あへて、こんな例——接吻——をとり出したのは、いはゆる東洋的微笑との對照のためで

もあるが、そればかりでなく、われわれの肉體的な symptomatisch な表現運動でさへ、歴史的な背景と社會的な習慣とに、大きく制約されてゐることを示したかつたからである。いひかへれば、Geheimtueri の微笑は、Geheimtueri の精神の産物なのである。(なほ、Kuss の古く歴史については、O. Schrader の Reallexikon d. idg. Altertumskunde のその項に、要を得た記述がある。)

(三) 講演のさいは、ここで、戦後の日本の社會の混亂に、一言、挿話として、言及するところがあつた。それは、講演といふものの性質をちよつと考へたからで、氣の利いたことのいへる自分ではないのだが、へ日本の娘も、アメリカのいはゆる G・I のおかげで教育されたといつて、聴衆を苦笑させたのである。意味のとりやうはいろいろであるにしても、この苦笑には、同じ敗戦國民としてのドイツ人の表情があるわけである。

(四) こんなことを、文化哲學者でもないわたくしが敢へて一言したのは、いまだに、西歐人たちは、東洋人、

特に日本人が、なにか、かれらには、先天的に理解しがたい素質をもつてゐるかに、とかく、考へがちだからである。

(五) この短い批判は、これだけでは、別に、時枝教授の強靱な體系をゆさぶるがごときものではない。その體系を総合的に示したところの主著、國語學原論(初版、昭和十六年)において、氏は、わたくしが述べるやうな批判はすでにあらはじめその提起を豫想して、序文のうちに、ある程度、まへもつて批判を封じてゐる。しかし、言語一般に關する形式的な基礎理論なら、どんな言語の研究からも、最後には到達さるべきであり、時枝氏の論理は、それを認めないでは成立しない。氏の、言語の本質は心的過程にありとして、みづからなづける「言語過程説」は、その説の成立の過程においては日本語が考察の對象に擇ばれたにせよ、うちたてられた學說そのものは、單に日本語にのみ內在的な理論ではない、それは、他のいかなる言語にも普遍的にあてはまらなくては、氏自身いふとき言語本質觀とは、なりえない。さういふ點で、形式的な・

言語の本質の問題と、質的な・科學的作業假説の批判の問題との限界が論理的に明瞭でない。缺點は、おそらく、ひとつには、西歐言語學を、ただちにもつて比較言語學なりとする時枝教授の獨斷から生ずるものと考へられる。

(六) わたくしは、この十五年間、國語學をしりぞけて、できれば、日本語學と變へたいものと考へてゐるが、一ぺん固定した因襲は、わたくしの力などではなかなか動かせないものらしい。

(七) ここにいふ *Stilsprache* とは、一般的な言語の様式 (*Sprachstil*) とはことなり、個人的文學的なしあげをうけた文體のこと。

(八) もちろん、原文のままではなく、漢字かなまじりに書きなほしてのはなしである。しかし、とにかく、齋藤茂吉の「萬葉秀歌」がベスト・セラーの勢をもつて賣れたといふやうなことは、ヨーロッパでは、絶對におこりえない現象であるといへよう。

(1) 言語現象としては、この微笑は文の抑揚と同じ價值をもつてゐるものである。文の抑揚は、もとより、そ

日本語とその研究との背景

れぞれの表現に適應した感情の陰影をつけ加へるものであるが、それそのものとしては言語から言語へと異つてゐるものである。この微笑の表現價值ないしはマナーリズムについては、芥川龍之介がその才機溢るゝ短篇の一つ「手巾(ハンケチ)」の中で興味のある批判的觀察を残してゐる。(ここに微笑と文の抑揚とを比べたのは、それが表現運動として有する價值に、ある意味では、はなはだあひ似た點をもつてゐると考へたからである。實例を示すこととしよう。英語で、少くとも、ブリティッシュ・イングリッシュでは、たとへば *I'm so sorry* といふばあひ、それを *[aim \sou \sɔ:ri]* と、あるいは *(I don't mind)* を *[ʌi dɔnt maind]* といふふう抑揚づける。あるふは、*(If you like)* を、*[if ju \laik]* *[if ju \laik]* *[if ju \laik]* のやうに、それぞれの氣分に應じて發音する。

かかる文の抑揚が、記號的ではなく、むしろ象徴的暗示的であることは、いふまでもあるまい。しかし、社會的習慣としては、それは、英語特有の感情表現の型に對應するのである。外國人たちには、英語の會話の

一 橋 論 叢 第三十二卷 第三號

習得にあつて、この文の抑揚を身につけることが、やかましくいはれる。その反面において、日本人の素朴な印象に對しては、*「I'm so sorry」* が抑揚を増して、鄭重の度を加へれば加へるだけ、それは、「大變すみませんけれど……」といふ言譯がましい日本語の表現へと一致してきこえるであらう。あるいは「*「He is so laik」*」といはれると、かういふ抑揚に慣れないうちは、なんだかいやでもひかへ目にしなければならぬやうな妙な逡巡を却つて感じてしまふかもしれない。かういふことの起るのは、文の抑揚が、ある一定の型そのものとしては、言語言語でその價値をひとしくしないからにほかならない。いはゆる西歐人の東洋的微笑も、日本人のがはからいへば、ある程度までは、英語の *「I'm so sorry」* の *['sɒri]* の發音に伴ふ *['sɒri]* であり、*「If you like」* の *['laɪk]* に加へられる *['ɪf]* とおなじである。——以上、括弧のなかの分、今回の補註。なほ、以上の英語の例文の *「If you like」* の *['ɪf]* に加へられた *['ɪf]* は H. Palmer の *「The superfor head」* は *the scandent head* である。

(2) ここに、古代日本語において、あたかも、指示代名詞から——たとへば、ロマンス語において冠詞が指示代名詞から發達したごとく(比較 *«la»*)——冠詞のないひ方が發達するかにみえることを指摘することは興味なしとしまい。しかし、人稱代名詞のばあひと同じく、指示代名詞を頻用することも、奈良時代がすぎると、衰へてしまつた。

参考、

保等登藝須許欲奈枳和多禮登毛之備乎都久欲爾奈蘇倍會能可氣母見牟(萬葉集、四〇五四番)

杜鵑此よ鳴きわたれ燈火を月夜に準へそのかげも見む(恐らく、平安朝時代においてであつたら、この第五句、「かげだにも見む」などして、「その」は用ゐなかつたであらう。いまは、煩を厭つて、例は、右の一例にとどめる)。

(3) 最古の語學的な業績としては、まづ第一、辭書の編纂が挙げられる。これは、意味分類體によつて、辭書と事典とを兼ねてゐる。(その代表的なものは、源順の倭名類聚抄。いま、十卷本と二十卷本とあり。ふ

つうには、十巻本の方が原形であるといはれてゐるが、二十巻本も、おそくとも、平安時代の末には存在してゐたことが、現存の寫本をもつて知られる。つぎには、日本語の音韻について深く考へた勞作があるが、これは、こんにち、日本語の音韻史を記述するにきはめて價値にとんだてがゝりを提供する。(平安時代の末に出た學僧明覺の悉曇要諦は、群を抜いてすぐれた音韻論的考察をふくむ書物である)。さらに、おくられて、十二三世紀に及び、梵語の名詞の活用を日本語の動詞の活用をもちゐて説明する試みがあらはれた。つまり、ここに、日本語の活用に對する意識の萌芽が

みとめられる。(これは、悉曇八轉聲鈔にみえる。この書は、それそのものとしては、さしたる高い價値をもつものではないが、梵語の名詞の活用を説明するに日本語の動詞をもつてしたといふ點には、ここには、詳説しないけれど、じつは、みのがしがたい深い意味がやどつてゐるのである)。

(4) 支那語と同様、日本語の名詞は不變化である。しかし、支那語とちがつて、日本語の動詞と形容詞は、錯綜した活用組織をもつてゐる。日本語の形態論の歴史が、用言の活用の變遷の記述にかぎられるゆゑんである。